

雑種成犬における直接的侵襲による冠動脈瘤作製の試み

国立循環器病センター小児科 神谷 哲郎

川崎病による冠動脈拡大性病変の、狭窄性病変への進展を確実に予防する方法は無く、また拡大性病変自体による冠循環動態の変動についても、不明な点が多い。この冠動脈拡大性病変の、狭窄性病変への進展様式及びその予防法、拡大性病変存在下の冠循環動態などの研究のため、雑種成犬を用いて冠動脈への直接侵襲による瘤の作製を試みた。

方 法

雑種成犬（体重7～23kg）を静脈麻酔下に、左側開胸にて心臓に到達し、pericardial cradleを作製した。左心房を翻転し、左冠動脈主幹部より、回旋枝、前下行枝にかけて剝離した。手術顕微鏡にて観察下に、冠動脈壁内にficinを注入した。急性実験では、3～24時間後に心臓を摘出し、死後冠動脈造影を行った。慢性実験では、1～2週後に選択的冠動脈造影を行った。またいずれの実験でも、心臓をformalin固定後、冠動脈を摘出し、step sectionを作製し、病理学的にも検討を加えた。

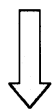
結果及び総括

- 1) 7kgの成犬にて行った急性実験では、回旋枝壁内にficinを注入したが、注入後5時間にて、肉眼的に注入部位の拡張を認め、死後冠動脈造影にて同部位の拡張が確認された。
- 2) 18kgの成犬にて行った慢性実験では、1)と同様にficinを注入したが、注入後5日目に死亡した。この例では、ficin注入部位の著明な拡張と、同部位の血栓による閉塞が認められ、左室側壁の心筋梗塞による死亡であった。
- 3) 23kgの成犬にて行った慢性実験では、ficin注入後1週間目に行った選択的冠動脈造影にて、ficinを注入した回旋枝起始部の拡張を認めた。また同部位の病理学的検索では、外弾性板の断裂と、平滑筋層の配列の乱れが認められた。

以上本モデルは、冠動脈瘤の実験モデルとして有用であると考える。

協同研究者 国立循環器病センター小児科 富田 英、越後 茂之

// 病 理 由 谷 親 夫



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



川崎病による冠動脈拡大性病変の、狭窄性病変への進展を確実に予防する方法は無く、また拡大性病変自体による冠循環動態の変動についても、不明な点が多い。この冠動脈拡大性病変の、狭窄性病変への進展様式及びその予防法、拡大性病変存在下の冠循環動態などの研究のため、雑種成犬を用いて冠動脈への直接侵襲による瘤の作製を試みた。